

ADULT ONLY

R18

18歳未満の
購入・閲覧禁止



くろこせい

AKASHI
×
KUROKO

同棲のフタ

一緒に暮らしてみませんか?
KUROKO'S BASKETBALL AKASHI・KUROKO



お帰りテツヤ
早かったね

赤司くん
はあ

ただ今
帰りま…

たっ
い

ズラッ



…僕も
手伝うので
待って下さいって
言いましたよね

それで急いで
帰って来てくれたの？
こんなに汗だくに
なってる…

確かに
手伝いも
有難いけど



「ただいま
征さん」
って言って
くれた方が
嬉しいよ

折角今日から
一緒に暮らせるん
だから

ね？



……
ただいまです

征さん……

うん

お帰りなさい
テツヤ

こうして
無事に始まった
同棲生活の
ほんの少しだけ
前のおはなし……

「つまり……僕と赤司くんが一緒に住むという事ですか？」

「同様しようって言葉の意味が、それ以外にあるかい？」

「そう、ですよ……」

想像していたものとは正反対の、困惑したような表情を浮かべて目の前の相手はそれきり俯いてしまった。

昼下りのカフェは比較的女性が多く、男同士が珍しいのかいくつかの視線が自分達に向けられている。

全面ガラス張りの店内に差し込む陽気とは真逆なこの状況に、店の選択を間違えたかと心の中で軽く後悔をしながら赤司は俯いてしまった恋人へかけるべき言葉を必死で探した。自分は何か彼の地雷を踏んでしまったのだろうか。そんな筈は無い、と思う。まさか黒子がこの提案に乗って来ないなんて事を考えていなかったし、笑って「はい」と言ってくれるものだと思っていた。

付き合い始めてもうすぐ10年。

時は何者にも平等に流れ、大人と呼ばれる存在になった。

月日が経つにつれ、嫌でも厳しい現実が押し寄せて来る。持っていた夢を諦めなければならぬ者、夢そのものを忘れてしまう者、葛藤の中に新たな夢を見つめる者。そして、小さい頃からの『夢』を叶える者。けれどそんな人間はほんの一握りで、多くの者は挫折を乗り越えながら生きている。自分にも夢に必死になった頃は確かにあった。あったからこそ、過去の。しかしこうして、一人の社会人として生きている今、それが本当に叶えたい夢だったのかと問われると酷く曖昧で答えに困る。

けれど、昔から『黒子テツヤ』という存在に固執していた事だけは確かだった。中学時代も、その後離れて過ごした数年間も、忘れた日など一日として無かったのだから。

「コーヒー、おかわりでも頼もうか」

口から出た声がほんの少し上擦って、自分が動揺しているのだと気付いた。黒子が無言で首を振る。その否定を一瞬別のモノと取り違えそうになって、思わず立ち上がりそうになるのを必死で抑えた。

「……少し、考えさせて下さい」

搾り出したような苦しげな声に何も言えなくなる。黒子にも思う所があるのだろう。ならば赤司のすべき事は一つ、彼が答えを出すまで待つだけだ。

「構わない。テツヤの気が済むまで考えてくれ」

「有難うございます」

「本当に君は、一筋縄ではいかないな。まあ、昔から何を考えているか分からない所はあったけれどね」

冗談めかしてやれば少しは気が楽になるか、そういう意味合いを込めたつもりで言葉を口にした瞬間、黒子の表情が一層曇った気がした。けれど余りにも些細で気のせいとも思えるそれに気遣える程、その時の赤司に心の余裕は無かった。

「……分からないですか？ 僕が何を考えているか」

「まあ、決して分かり易い方では無いからね。今でも時々何を考えているのかな、と思う事はあるよ」

「……」

「それがどうかした？」

返事は無い。それどころか、それきり黒子が言葉を発する事は無かった。

気まずいまま別れたデートから数週間。

分り易く言ってしまうと赤司は黒子に避けられていた。完全に、徹底的に、こちらからの連絡を完全にシャットアウトされてしまっている。メールの返事も無ければ電話をしても虚しくコールが鳴り続けるだけ。原因は何となく分かっている。けれど理由が分からない。「同棲しないか」と誘っただけで何の強制もしていない。なのに何故ここまで避けられなければいけないのか、赤司にはまったく理解出来なかった。

こうなったら家に訪ねるしかない、今日は黒子を家の前で待ち伏せてみた。外だと逃げられかねないので部屋の明かりが灯くまで気付かれないよう隠れて待つ。こんな事をしている自分が酷く滑稽でらしくないと思いつつ、そこまで必死にさせる黒子という存在の重要性を改めて思い知らされる。もう、彼なしでは生きられないのではないかとさえ思う。そんな相手に捨てられてしまう予感、怖いので自分の中から消去済みだ。

こんな時間に訪ねても扉を開けてくれないかもしれない。こんな緊張するドアチャイムは初めてだと苦笑しながら殆ど勢いでボタンを押した。中から微かな足音が聞こえる。扉へ近づいてくる気配。一瞬逃げてしまいたくなかったが、寸前の所で踏みとどまる。

長い沈黙。きつと黒子はここに立っているのが赤司だと分かっている筈だ。

「テツヤ。そこにいるんだろ」

再び長い沈黙。

「ドアを開ける気にはならない？」

答えが返ってくるまで必死に耐える。すると、暫くして鍵を開ける音がした。ドアの隙間から薄く明かりが漏れ、俯いた黒子が姿を見せた。

「こんな夜中に、どうしたんですか？」

「どうしたって……それは俺の科白だと思っただけど、違う？」

「訪ねて来る程の事じゃないと、思います」

「俺を避けているのは、気のせいだって言いたいのか？」

「……すみません、今は忙しいので」

扉を閉めようとする黒子に気付いて、赤司は咄嗟に足を差し込んでそれを阻止する。

「答えになってないよ」

「足を引いて下さい」

「せめて理由だけでも教えてくれないか」

「足を引いて下さい」

「テツヤ！」

「引いて下さい……」

同じ言葉を繰り返されるのは、意外にダメージが大きかった。

それでも無理に閉めてしまうような真似はしない。無意識なのだろうがそこに黒子の優しさを感じて、すぐにそんな場合じゃないと我に返る。そのままじやがが明かない。

「俺が『同棲しないか』と言ったの事が関係してるよね？」

「そ……それとは、関係ありません……あつ！」

あからさまに動揺をした黒子はドアノブを握り締める力を緩めた。隙ありとばかりに赤司が足で無理矢理ドアをこじ開け、部屋に押し入る。勢い良く黒子の二の腕を掴んでそのまま玄関に押し倒した。

ボタン、と扉の無機質な音が小さく響く。

「本当に関係ないって言える？」

赤司の鋭い目が、黒子のそれとぶつかる。視線の強さに黒子は目を逸らせない。食われる前の小動物のように動けなくなる。怖い。逃げたいのに逃げられない。

「うで……痛い、です」

震える声で言っても、何の効力も無い。

「答えてくれるまで放さないよ」

黒子を落とすには一度追い詰めるしかない。それを知っているからこそ、赤司は可哀相だと思いつつもこういう手段に出してしまう。

「……少し考えさせてくれるって言ったのは、赤司くんです」

漸く観念したのか、今にも泣きそうに瞳を揺らしながら黒子が答える。

「やっぱりね。でもこれじゃあその場で断られての方がまだマシだ。メールも返さない、電話も出ない、直接訪ねても追い出される……。テツヤが今何を考えているか、俺にはまったく分からない」

瞬間、黒子の身体がビクンと跳ねた気がした。

気のせいだろうかと疑っていると、黒子の瞳が一気に湿りはじめる。

「そ、そんな相手と……」

唇を強く噛んで、黒子が一瞬言葉を躊躇う。

「……そんな相手と、赤司くんは本当に一緒に住めるんですか？」

「え？」

「何を考えているか分からない相手と一緒に居て、本当に幸せになれるんですか？」

一瞬で立場が逆になる。黒子がこんなに鋭い瞳をぶつけて来る所を、赤司は試合以外で見た事が無かった。

「僕は今まで『普通じゃない』とか『おかしい』とか、そんな言葉を沢山

言われてきました。それでも、自分の体質や性格を理解して受け入れてくれる人が近くに居ればそれで良かった……」

黒子は震える喉をゆっくりと閉じる。その瞳の奥に何を見ているのか、赤司は心の底から見たいと思った。

「けれど僕はもう大人で、なのに僕は昔と何も変わらない。普通じゃないまま大人になって、歳を重ねる度に不安が増していくんです。僕はこのままで本当に良いのか、分からなくなる」

彼の言葉が何を示しているのか理解出来ず赤司が首をかしげる。

「赤司くんと一緒に暮らそうと言われて、とても嬉しいのに……凄く、怖いです」

薄く開かれた相手の視界にどうにかして入ろうと、赤司は身体を引いて覗き込んだ。けれど彼の目は虚ろで、何も映そうとしない。

「僕まで離れるなんて、どうしてそんな馬鹿な事思ったの？」

「だってあの時言ったじゃないですか！ 僕が何を考えているか分からないって……！」

「……」

「今だって、分からないって言いました」

「それは君が何も言わずに俺を避けるからだろうか？」

「でも、そんな相手とずっと一緒に居て上手くいく筈がない。いつか不満が膨らんで、全部壊れるんだ！」

泣いた顔を見せたくないのか、目を腕で覆い隠して黒子は叫んだ。

あの日、確かに彼に投げかけた言葉を脳裏に思い浮かべ、赤司は深く後悔をした。自分にとっては些細な言葉が、彼をこんなにも深く傷つけていたのだ。

「そんなのは絶対に嫌なんです。絶対に壊したくない。嫌われたくない。

捨てられたら、僕はもう生きていけない」

耳を澄まさなければ聴こえない程微かなのに、その声は不思議とよく響いた。

「だから少し時間が欲しかった。僕の中にある弱さを消す為の時間が」

「どうしてそう言ってくれなかったの？」

「言葉にしても、願ってもどうにもならない事もあると、知っているから」

「君らしくない」

「僕らしいって何ですか？ 僕にだって怖いものくらいあります。だって僕にはもう、赤司くんしか居ないのに……」

黒子の言葉に思わず顔が熱くなる。「好きだ」とか『愛してる』だとか、そんなモノよりもっと強く、激しい言葉。こんな告白をされて、泣いている相手に申し訳無いと思いつつも顔が緩んでしまう。

「本当に君は……」

濡れた頬に触れようとすると、強く跳ね除けられた。その勢いのまま身体ごと横を向いてしまい、腕で自分の顔を覆い隠してしまふ。ここまで来ると拗ねた子供の様で、赤司は思わず苦笑した。

「どうして君だけ『普通じゃない』ってカテゴリーに居るの？」

めげずに髪に手を伸ばして優しく撫でる。今度は抵抗して来なかった。

「充分俺もその中に居ると思うけど」

そんな自分でも構わないと受け入れてくれたのは彼だ。

「俺はテツヤと一緒に居る為ならどんな事でもする。そんな極端な人間なんだよ。もしそういう選択をしなければ君を守れないなら、迷わず誰かを殺めてしまう位にはね」

想いは言葉の通り、少しも大袈裟ではない。

「まあ、俺がこう言ったからってテツヤの気が晴れるとは思えないけど」

そつと黒子の腕を持ち上げる。

「それでも知ってて欲しいと思うのは、俺の我儘かな？」

「……いいえ」

「なら、その可愛い泣き顔俺に見せてくれないかな？」

「……もう良いです。何だか悩んでいた自分が馬鹿みたいだ」

珍しく気まずそうにしている恋人の顔があまりにも可愛らしくて、その表情に吸い込まれるようにキスをしてしまふ。

「嫌だったら怒ってくれて構わない」

そつと頬に触れる。

「でも、嫌じゃないならそのまま……」

再び唇を重ねながら、腰に手を回してこちらを向かせた。同じタイミングで黒子も腕を回してくる。浅いキスを何度も繰り返す、そのうちに首へ、肩へと場所を下げて愛撫していく。いつもよりくぐもった声で囁く黒子が気になって視線をうつすと、どうやら必死で堪えているようだった。

「あか、しく……ここ、玄関……っ」

「もしかしてそれで声抑えてたの？ 可愛いなテツヤは」

「ひあ……っ」

わざと感するように乳首を指で擦り上げてやる。もっと感じれば良い。そして自分の事以外考えられなくなってしまえば良い。居るかも分からないう誰かにまで嫉妬してしまうのだから、本当に自分は性質が悪い。

「余所見しないで」

「な、に……？ ああっ」

Tシャツを乱暴にたくし上げて本格的に唇で愛撫を始める。何も無しでは耐えられなくなったのか両手で必死に声を出すまいとしている姿に可愛と思うと同時に妙な苛立ちに襲われる。相反する感情なのに、こちゃ混

せになって誤が分からない。大事にしたいのに苛めたい。幸せて居て欲しいのに……もっともっと、自分の事で追い詰められている姿を見たい。

「まったく、捨てられるとしたら俺の方だ」

「え？」

「いや、何でも無いよ。さて、どこまで声が耐えられるか試してみようか」

下肢にまで手を伸ばし、既に熱く湿っている部分に触れる。それだけで黒子の全身が震え、更に深い快楽の入口へと足を踏み入れていく。さっきまで強張っていた全身の力がふっと抜けるのが分かった。

「んん、ふっ……ああっ！」

「良いの？ 外に聴こえるよ」

「や、だあ……」

どんどんと濃密になっていく快感を持って余して、再び赤司にしがみ付く。先程よりも熱く強いそれに煽られて深いキスを交わす。もうキスなんていう言葉だけでは表現しきれない。重なった部分から痺れる様な気持ち良さが全身に流れ込んで、まるで一度味わったら抜け出せなくなる麻薬みたいな2人を犯していく。それだけで達してしまいそうになって赤司は射精感を必死に抑えた。誰かに聞かれてしまうかもしれないという危機感が快楽を強めるのか、黒子は肌を擦るたびに涙を流して痙攣に近い善がり方をしている。先走りを潤滑剤にひくついた内壁を擦り始め、その震えは一層強まった。

「あ、はあっ……ふう……あああ……」

繋がる前からここまで乱れるのは初めてだ。

「そんなに気持ち良いの？」

「あ、かしく……やめ、ないで……」

「何を？」

「キス、やめないで……声、があ……」

漏れてしまう。暴かれてしまう、こんな淫らな自分を。

「俺は皆に聞いて貰いたいけど、テツヤは俺のモノだって」

「や、だ……あか、しく……だけ……」

赤司君だけが良い。他の誰にも知られたくない。それ以外は、要らない。

「テツヤが俺と一緒に暮らしてくれるって言うなら、してあげる」

こんな時に言うなんて、本当にずるい。

「もっと同じ時間を共有して、テツヤを知りたい。もっと深い所まで、知り尽くしたい」

「あああっ」

わざと深くまで抉る様な刺激を与える。耐えられる筈が無い。こんなの、

こんな……深い愛情を見せ付けられて、答えない訳がない。

「テツヤの答えは？」

少し顔を動かせば重なりそうな場所まで唇が近付いて来て、お預けを食らう犬の様に息を荒げる。こんなに欲しいと思っただけは初めてかもしれない。欲しい、どうしても、目の前に居る愛する人と繋がりたい。

「僕も、もっと知りたい……深く、もっと深く……んんあっ！」

弛緩した部分へ果てる寸前のそれを一気に押し込んだ。同時に再び深く唇を合わせて響くであろう声さえも食らう。

「んっ……ふう……んんあっ……！」

抱えきれない衝動に、黒子は大きく身体を跳ねさせて果てる。同じく限界寸前だった赤司も、射精した黒子の衝撃を受けて達した。

荒い息を整えながら、赤司は心の中で謝罪をする。彼を少し苛めすぎてしまった。自分の悪い癖だと思いが、二十年以上付き合っている性格なだけに、変える事は難しい。黒子はきつと、これからも苦勞をするなど

他人事の様に想像する。

「ごめんね。でも、それが俺なんだ……」

だから、受け入れてね。

気を失ってしまった相手の頬をそつと撫でて、赤司は2人のこれからを思った。

※

「何だ、その馬鹿みたいな理由」

珍しく不機嫌さを表に出して、赤司が黒子に冷たい視線を送った。そもその原因という話になり、黒子が不安を感じ始めたきつかけは何かと聞えば、何の事は無い、保育園の同僚に「黒子さんの恋人って苦労しそうですよね。だって基本的に何考えてるか分からないし」と笑顔で言われたから、というのだ。下らない。実に下らない。下らな過ぎて不機嫌にもなるというものだ。

「酷いです、僕は真剣に悩んでたのに……」

「良いかい？ 俺さえ良ければ、他人の意見なんてどうでも良いんだよ」
非道德的な事を平然と言ってるのける。

「俺がテツヤと居たい。それじゃあ不満？」

「……じゃ、ありません」

「ならこの話は終わり。さて、それで新居の間取りの事なんだけど」

「切り替えが早すぎます赤司くん……」

俺はいつでも同じスイッチだよ、とふざけてみせる。

机の上にはいくつもの住宅情報誌がつまれている。拘りの強い赤司らしく、雑誌にはいくつもの付箋が貼られていた。朝日が差し込むように東に大きな窓のある部屋にしよう。各々に部屋が1つずつ、ベッドルームにはキングサイズのおふかふかベッドを。そうだ、犬を飼うのも良いかも知れない。

けれど一番大切なのは、隣に貴方が居てくれること。

END







好きだよ
テツヤ...

ほく...も...

あっ...

ひ...ん...

せっ...
征さ...っ...

んんっ!

それこそが
俺達の掴んだ
しあわせ

.....って
寝ちゃったか

これからは
ずっと2人で
一緒に眠ろう

同棲のススメ

～一緒に暮らしてみませんか?～

KUROKO・I BASKETBALL ANAHI・KUROKO